



2026コレクション展Ⅱ 前衛って何だ!?

2026年10月20日（火）－ 2027年2月23日（火・祝）

令和8年度の兵庫県立美術館のコレクション展Ⅱは「前衛」をテーマに構成します。1986年にパリ、ポンピドゥー・センターで開催され、当館（県立近代美術館時代）や阪神間の作家が出品協力した「前衛芸術の日本 1910－1970」展から40年となるのを機に開催します。「前衛」とは何か、「前衛」の意味するものとは？戦前から戦後まで、さまざまな「前衛」について考える機会とします。テーマ「前衛」につづく展示の後半では令和7年度の新収蔵品を展示するほか、恒例の「美術の中のかたち—手で見える造形」では彫刻家の青木野枝さんをお迎えします。2階展示室の会期後半には当館の梅舒適コレクションから、特集「王一亭とその時代」を開催します。

見どころ

1 「前衛芸術の日本展」に出品された作品も含め、当館のコレクションを通して「前衛」を6章構成で考えます。西欧の影響を受けておこった「前衛」から日本独自の「前衛」まで、「前衛」をいろいろな言葉で展開しながら、日本の戦前、戦後美術をたどります。

2 令和7年度の新収蔵品から、赤松玉女（1959年、兵庫県生まれ）の絵画、星野美智子（1934年、東京都生まれ）、松元悠（1993年、京都府生まれ）の版画、米田知子（1965年、兵庫県生まれ）の写真作品をお披露目します。偶然にも女性作家が揃いました。作家それぞれの個性あふれる旬の作品をご覧ください。

展示構成

3階 | 展示室1・3

テーマ展 「前衛って何だ!？」1-5章 / 新収蔵作品紹介 (展示室3)

3階 | 展示室2

小企画 「美術の中のかたち一手で見る造形 青木野枝 動体」 ※別紙プレスリリース参照

2階 | 小磯良平記念室・金山平三記念室

戦前作品を中心に

2階 | 常設展示室6

テーマ展 「前衛って何だ!？」6章 (日本画・書・写真) 10月20日(火) - 12月13日(日)

特集 「王一亭とその時代 上海近代芸苑と日中文化交流」 12月17日(木) - 2月23日(火・祝)

※後日プレスリリース予定

テーマ展 | 3階展示室

第1章 前衛とは「これまでになかったもの」である



元永定正《タビエ氏》1958年 山村コレクション

戦後、最もエネルギッシュで熱い活動を展開した前衛グループのひとつである「具体」を、「前衛芸術の日本展」への出品作も含め、展示します。「前衛芸術の日本展」では、吉原治良、白髪一雄ら「具体」の主要作家の作品が展示されました。「具体」の国内外での評価がゆるぎないものとなったのはこの展覧会がきっかけとされています。

出品作家 吉原治良、白髪一雄、元永定正、田中敦子ほか



白髪一雄《作品II》1958年

第2章 前衛とは「先端」である

「前衛芸術の日本展」の起点は1910年。西欧では20世紀の初頭、未来派やキュビズム、フォービズム、表現主義など非写実的傾向の美術が、さらにダダ、シュルレアリスムなど前衛的な動きが出現しました。1920年10月、ロシアの画家、ダヴィド・ブルリューク、ヴィクトル・バリモフが来日、彼らが開催した日本で最初のロシア画覧会は大正期の新興美術の大きな推進力となったほか、1920年代には新しい表現に挑む尖鋭的なグループがつぎつぎとあらわれました。つづく1930年代には、シュルレアリスムや抽象美術に影響を受けた画家たちも登場します。

出品作家

ダヴィド・ブルリューク、恩地孝四郎、浅原清隆、岡本唐貴、坂田一男ほか



岡本唐貴《ベシミストの祝祭》1973年（1925年）



坂田一男《女と植木鉢》1926年頃

第3章 前衛とは「断絶」である

1950年代にフランスでおこったアンフォルメル（＝不定形の意）は、フランスの批評家ミシェル・タピエが提唱した抽象絵画の一傾向で、日本でも「アンフォルメル旋風」とよばれ一時ブームとなりました。「何か」をマチエール（物質）によって表現するのではなく、「何か」を表現する「手段」そのものを目的化し、マチエール（物質）そのものの中に表現的可能性をみようとするアンフォルメルは、「物質」が「表現」にとってかわったという意味において近代芸術の伝統からの断絶であったと評価されています。

出品作家 今井俊満、堂本尚郎、菅井汲、田淵安一ほか



堂本尚郎《絵画1》1956年 山村コレクション



菅井汲《AO(BLEU)》1962年

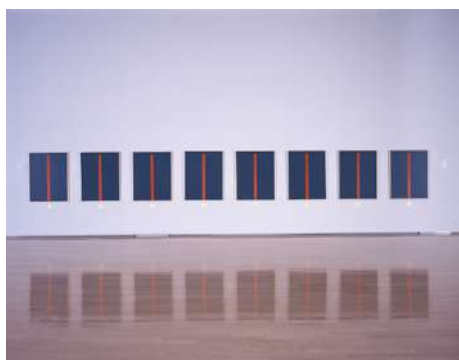


山口長男《垂》1965年

第4章 前衛とは「逸脱」である

1949年に発足した無鑑査の公募展、読売アンデパンダン展は作家たちの自由な発表の場として毎年開催されましたが、第9回展(1957年)ごろから出品物が次第に過激化し、それらは「反芸術」の名で言い表されるようになりました。1950年代後半から60年代にかけてさまざまな前衛グループがあらわれ、既成の芸術概念から逸脱するような活動を展開します。これらの過激で価値破壊的な活動は、美術の制度やあり方を根底から問い直すものでした。

出品作家 荒川修作、菊畑茂久馬、須田剋太、高松次郎ほか



グループ位《非人称絵画(8点組)》1965年(2004年)



高松次郎《脚立の紐》1963年(1985年) 山村コレクション

第5章 前衛とは「否定」である



河口龍夫《DARK BOX 2007》2007年

「前衛芸術の日本展」、造形美術セクションの最後は「もの派」でしめくられます。1968年、第1回神戸須磨離宮公園現代彫刻展で発表された関根伸夫による《位相—大地》は大きな衝撃をもたらしました。この作品が発端となり土や石、木などの未加工の自然物を用いる一群の作家たちがあらわれました。彼等に共通するのは「あるがままにあることを、あるがままに見せる」「つくらない」ことであり、近代西欧美術における「創造」を否定したことでした。「もの派」は日本の戦後美術において、はじめて日本の固有性を示したともいわれています。

出品作家 小清水漸、河口龍夫ほか

第6章 前衛とは「越境」である

※[展示期間] 10月20日(火)－12月13日(日)

1950年代、書と絵画がジャンルを超えて接近します。1951年に書家の森田子龍らが創刊した書芸術雑誌『墨美』は、海外の前衛美術を紹介し、画家たちにも大きな影響を与えました。文字を超えた形の表現としての書と絵画とが交わり一つの表現を生んだことは、日本（東洋）における書画一致の伝統への回帰とみることもでき、日本独自の前衛ともいえます。

「前衛芸術の日本展」では、戦前、戦後の「写真芸術」のセクションが設けられました。1930年代、フォトグラムやフォトモンタージュを駆使し、写真の新たな表現に挑み日本の新興写真に大きな役割を果たした中山岩太、ハナヤ勘兵衛の作品を展示します。

出品作家 森田子龍、富岡鉄斎、水越松南、中山岩太ほか



森田子龍《坐組上》1969年



中山岩太《デモンの祭典》1948年（寄託）

小磯良平記念室・金山平三記念室

戦前作品を中心に、パリ留学経験を持つ小磯良平・金山平三両氏の名品を展観します。小磯記念室では、新収蔵品《踊り子群像》を中心に、戦前における小磯の市井の人々へのまなざしを紹介します。あわせて、《斉唱》をはじめとする戦時中の代表作も展示します。金山記念室では、金山の画業初期、とりわけ1910年代前半の滞欧期にフランス各地を描いた風景画や人物画にフォーカスするとともに、帰国後、戦前から戦後の国内風景画とあわせて紹介します。



小磯良平《踊り子群像》1939年



金山平三《林檎の下（ブルターニュ）》1915年

関連事業

HART TALK 館長といっしょ! Vol.22

「前衛芸術の日本展から40年—フランスからみた日本の前衛—」

講師 岡部あおみ（美術評論家、キュレーター）

日時 2026年11月15日（日）14:00—15:30（予定）

会場 KOBELCO ミュージアムホール（定員150名）

※当日先着順、参加無料

記念講演会（特集展示）

「王一亭をめぐる人々—近代日中文学界の交流の諸相（仮）」

講師 板倉聖哲（東京大学東洋文化研究所教授）

日時 2027年1月10日（日）14:00—15:30（予定）

会場 KOBELCO ミュージアムホール（定員150名）

※当日先着順、参加無料

学芸員によるギャラリートーク

日時 2026年10月31日（土）、11月28日（土）、12月26日（土）、2027年1月23日（土） 11:00—11:30

会場 展示室（定員20名）

※当日先着順、参加無料（要観覧券）

① ゆっくり解説会 in Autumn（手話通訳・要約筆記付き解説会）

日時 2026年11月8日（日）13:30—14:25

会場 レクチャールーム（定員60名）

② ゆっくり解説会 in Winter（手話通訳・要約筆記付き解説会）

日時 2027年2月14日（日）13:30—14:25

会場 レクチャールーム（定員60名）

※①②とも当日先着順、参加無料

こどものイベント

※詳細は決まりしだいウェブサイトにて掲載します

ミュージアム・ボランティアによるガイドツアー

日時 会期中の毎週土・日 13:00—13:30

※当日先着順、参加無料（要観覧券）

県美文化セミナー

松隈洋氏講演会「日本のミュージアム建築100年—前川國男の仕事を通して」

講師 松隈洋（神奈川大学教授／京都工芸繊維大学名誉教授／工学博士）

日時 11月7日（土）14:00—15:30

会場 KOBELCOミュージアムホール（定員150名）

※当日先着順、参加無料

基本情報

会期 2026年10月20日(火) – 2027年2月23日(火・祝)
※会期中、展示替えを行います

開館時間 10:00 – 18:00 (入場は閉館の30分前まで)

休館および
休室日 月曜日 [ただし11月23日(月・祝)、2027年1月11日(月・祝) 開館、11月24日(火)、2027年1月12日(火) は休館]
および12月28日(月) – 2027年1月4日(月) の年末年始
※2階常設展示室6は12月15日(火)、16日(水) 休室

観覧料	コレクション展II (全室共通)	当日	団体 (20名以上)	特別展との セット料金	コレクション展無料の日
一般		550円	400円	300円	○公益財団法人伊藤文化財団の協賛による無料日 ・国際障害者デー 12月3日(木) ・ひょうご安全の日 1月17日(日) ・第2日曜日(自由に話せる観覧日) 11月8日(日)、12月13日(日)、2027年1月10日(日)、 2月14日(日) ○文化の日 11月3日(火・祝) ○関西文化の日 11月14日(土)、15日(日)
大学生		400円	300円	200円	
高校生以下		無料	無料	無料	
70歳以上		250円	200円	150円	
障害者手帳等をお持ちの方とその介助の方1名は無料 ※一般以外の料金には証明できるもののご提示が必要です					
主催	兵庫県立美術館				
協賛	公益財団法人伊藤文化財団、サンシティタワー神戸(株式会社ハーフ・センチュリー・モア)、 一般財団法人安藤忠雄文化財団				

同時開催の展覧会

国立美術館 コレクション・ダイアログ
松方幸次郎 × 山村徳太郎 蒐集のパッション
ーロダンをも日本へ、具体をも世界へ
10月10日(土) – 12月27日(日)

チャンネル 17 黒川 岳
11月28日(土) – 2027年1月31日(日)

Ando Gallery
当館 2F (入場無料)

横尾忠則現代美術館での同時開催

Curators in Panic 2 ～横尾忠則展 学芸員危機2髪？
9月19日(土) – 12月27日(日)

横尾忠則のビフォー／アフター
2027年1月30日(土) – 5月5日(水・祝)

取材についてのお問い合わせ

兵庫県立美術館
広報・営業担当 福田・高村・成松
TEL 078-262-0905(直通) FAX 078-262-0903
Email press@artm.pref.hyogo.jp

交通案内

阪神「岩屋駅(兵庫県立美術館前)」から徒歩約8分
JR神戸線「灘駅」南口から徒歩約10分
阪急神戸線「王子公園駅」西口から徒歩約20分
JR「三ノ宮駅」から神戸市バス(29、101系統)にて約15分、
「県立美術館前」下車すぐ
地下駐車場(乗用車80台収容・有料)

※ご来館はなるべく電車・バスをご利用ください
※団体バスでお越しの場合はバス待機所のご予約をお願いします



2026コレクション展Ⅱ「前衛って何だ!？」 広報画像申込書

ご希望画像の作品番号にチェックを入れ、媒体情報をご記入の上、本紙をE-mailまたはFAXにてお送りください。
 なお、申込の確認に数日かかる場合がございます。あらかじめご了承ください。

[兵庫県立美術館 広報・営業担当]

E-mail: press@artm.pref.hyogo.jp / FAX: 078-262-0903

【画像使用に際しての注意事項】

- 「作家名」「作品名」「制作年」「所蔵先」など指定のキャプションを明記してください。
- 作品画像の加工（着色、トリミング、文字載せなど）はできません。
- 基本情報、画像使用の確認のため、原稿・ゲラの段階で「広報・営業担当」までお送りくださいますようお願いいたします。
- 掲載媒体を1〜2部、もしくはURL、同録（DVD、CD）を「広報・営業担当」宛にお送りください。
- 画像使用は本展覧会の紹介用のみとさせていただきます（会期終了まで）。
- 再放送、転載など二次使用をされる場合には、改めて申請をお願いいたします。

□ 1 	□ 2  元永定正《タビエ氏》1958年 山村コレクション	□ 3  白髪一雄《作品Ⅱ》1958年	□ 4  岡本唐貴《ベシミストの祝祭》 1973年（1925年）
□ 5  坂田一男《女と植木鉢》1926年頃	□ 6  堂本尚郎《絵画1》1956年 山村コレクション	□ 7  高松次郎《脚立の紐》 1963年（1985年） 山村コレクション	

■貴媒体の情報をご記入ください

□媒体名（番組・雑誌名等）：

□媒体種：新聞・雑誌・ミニコミ・TV・ラジオ・WEB

その他（ ）

□掲載・放送予定日：

□参考URL：

□原稿確認予定日：

※WEB掲載の場合、いずれかに○をつけてください

コピーガード対応 可 ・ 不可

■申請者の情報をご記入ください

□貴社名：

□所在地：〒

□ご担当者名：

□メールアドレス：

□電話番号：

読者・視聴者プレゼント用招待券： 組 名分を希望
 ※最大5組10名まで。本展を媒体でご紹介いただける場合に限りです



取材申込書

取材をご希望の方は下記にご記入のうえ、
取材希望日の3営業日前までに、メールまたはFAXにてお申し込みください。
メール： press@artm.pref.hyogo.jp F A X： 078-262-0903

お申込日 年 月 日

<< 取材内容 >>

[illegible]

ご連絡先	担当者名	
	社名・部署名	
	住所	
	電話番号	
	FAX	
	E-Mail	

*企画内容によってはご要望に沿えない場合もございますので、あらかじめご了承ください。

* 作品の著作権保護や出展作品のクレジット確認等のため、展示風景や作品の画像使用にあたっては、紙面掲載、番組放送前に原稿を確認させていただいております。校正段階での原稿・映像等を事前に広報専用メールへご提出ください。

*掲載媒体を1~2部、もしくはURL、同録（DVD、CD）をお送りください。

〈取材についてのお問い合わせ〉

兵庫県立美術館 広報・営業担当 福田・高村・成松
〒651-0073神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1

TEL : 078-262-0905 FAX : 078-262-0903 Mail : press@artm.pref.hyogo.jp